

【実践報告】

保育実習および保育実習指導（福祉）の報告

広島文教大学人間科学部人間福祉学科

教授 木 村 敦 子

准教授 宇都宮 千賀子

1 はじめに

人間福祉学科では社会福祉士受験資格取得の学修とともに、保育士資格取得希望者は保育士課程も履修する。保育に関する既習の学びの上に、保育実習Ⅰ、Ⅱ又はⅢとして段階的に目標を設定し、児童福祉施設（保育所・保育所以外の児童福祉施設（以下「施設」という。））での実習を行っており、本稿ではその概略を説明する。また、令和3年度の保育実習Ⅰでは、新型コロナウイルス感染拡大により、複数の施設で実習受入が困難となり、代替演習を実施することとなったので、その内容を報告する。

2 実施の概要

（1）保育実習指導ⅠA：2年後期（1単位）

1年次4月に保育士履修説明会、2年次前期末に「保育実習指導Ⅰガイダンス」と事前学修の機会を設定し、更に事前課題の「意向調査票」の作成で実習先としての情報収集などの準備を経て授業に臨む。まず、「保育所・施設実習の意義」、「保育所・施設の役割と機能」、「実習施設の理解」について学修する。施設実習はイメージを持ちにくいので、ビデオ教材を利用した。1日の流れを場面ごとに細かく視聴することで具体的理解ができ、施設の保育士がやりがいを語る場面は心構えの学びに効果があったことが見てとれた。希望する実習種別が固まった後、施設決定に至るまでは教員との相談を重ねていく。今年度はコロナ禍の中、種別によっては受入が難しく調整を要したが、いったん実習先が決定すると意識が高まる様子であった。更に書類作成などの準備、内諾訪問に至るまで自らが実習先とやり取りをするプロセスを経る中で、様々なマナーや留意点及び適切な報告、連絡、相談などの基本的態度を身に付けていった。毎回作成の授業記録には、そのプロセスにおいて学びがあることが記されている。また、春休み中に、実際に現場で使うことをイメージしながら「名札作り」、「家事レポート」課題に取り組むことで次期に向け意欲を継続するようにした。

（2）保育実習指導ⅠB：3年前期（1単位）

「実習の倫理と心構え」を学ぶほか、これまでの学びを総動員して実習における各自の「目標と課題」を設定していく。「施設理解」、「子ども（利用者）理解」、「保育士理解」に関する目標とそれに対する取組をまとめる。初めての作成には戸惑いを感じがちのようだが、今年度からの「理解する視点」、「観点」、「行動」と階層で組み立てる指導により取り組みやすくなり、一斉授業の後は担当教員が個別指導を行い、また学生間の意見交換を経て完成をさせた。「日誌の書き方」の授業は非対面授業となったため、動画を示して記録の練習をしたが十分とは言えず、先輩の日誌の例示に学ぶことで助けられた。実習直前の指導としては、今年度は特に健康管理、危機管理を丁寧に取り組んだ。施設と連絡を密に取り、必要とされる感染予防対策を講じる準備をした。実習開始の約1月前に、先輩の「保育実習報告会（事後考察報告書に基づく発表）」を実施し実習前の学生が参加し、イメージ作りと緊張や不安感がほぐれる貴重な機会となった。

（３）保育実習Ⅰ（保育所）及び（施設）：３年前期（８月～９月）（２単位）

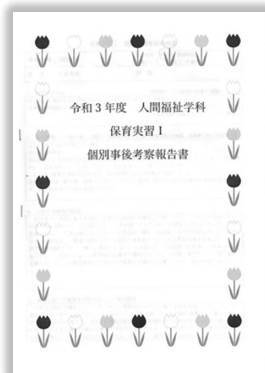
保育所及び施設において各10日間の実習を行う。実習中担当教員だけでなく学科教員が巡回指導を実施する。今回は、新型コロナウイルス感染拡大に加え、大雨で緊急避難警報が発出されたこともあり、待機を要する学生も出たが、大学からのメールや電話での応援に応じて実習に臨む態勢を維持してくれた。また、入所型施設の実習では、感染予防のための制限が当然ながら大きく、かかわりを取ることに模索しているとの報告もあったが、学生は何とか乗り切った。もちろん施設から多大なサポートがあり、教員も臨機応変の巡回指導対応（訪問ができない場合、オンラインや電話指導あるいは施設には赴くが建物の外で話すなど）を行った。

（４）保育実習指導Ⅱ・保育実習指導Ⅲ：３年後期（２単位）

「保育実習Ⅰ」と「保育実習Ⅱ」を総合的に捉え、保育実習Ⅰの振り返りから成果と課題を明確化し、保育実習Ⅱ・Ⅲで段階的な学びとなるよう「目標と課題（Ⅱ・Ⅲ）」を設定し、課題意識を明確にして次の実習に臨む準備を行う。

実習後「個別事後考察報告書」を基にグループと全体で討議を行い、多様な体験や指導から学び合うことができ、次の実習に向けた課題が明確になった。この後、担当教員が実習施設からの評価開示面談を学生の自己評価とすり合わせながら行う。実習に臨む態度や子どもとのかかわりの積極性は実習先評価、自己評価ともに高かった。この流れで明確になったことを「目標と課題（Ⅱ・Ⅲ）」としてまとめることになる。「保育士の倫理」、「保育実習の心構え」は事例を通じてより深く学び、ワークシートや小テストで更なる確認を図った。

また、新型コロナウイルス感染症予防対策をはじめとする健康管理及び危機管理については様々な事例をもとに指導を徹底した。



（５）保育実習Ⅱ・保育実習Ⅲ：３年後期（２月～３月）（２単位）

保育実習Ⅰの経験を踏まえた発展的な実習を行うこととしており、保育実習Ⅱの目的は「保育所の役割や機能の具体的展開の理解」、「観察に基づく保育理解」、「子どもの保育及び保護者・家庭への支援と地域社会等との連携の理解」、「指導計画の作成、実践、観察、記録、評価」、「保育士の業務と職業倫理の理解」、「自己課題の明確化」、保育実習Ⅲの目的は、「施設の役割と機能の理解」、「施設における支援の実践」、「保育士の多様な業務と職業倫理の理解」「自己課題の明確化」の４点である。ちなみに保育実習ⅢはⅠとは異なる種別の施設で行うこと、また、保育実習Ⅰの後で相談援助実習を体験して保育実習Ⅱ・Ⅲに臨むことも施設実習の学びを深めることにつながっている。

令和４年１月以降、コロナ禍は拡大傾向であり、実習先も受入れについての調整を重ねていただいている。この状況下で、学生は改めて施設実習、保育士養成の意義と社会の期待を学び直す機会にもなっていると思われる。報告、連絡、相談、対応が迅速になって、学生の取組姿勢には成長がみられている。

3 今後の課題

実習時の感染症対策は今後も緩められず、特に入所型、社会的養護の施設、障害関係の施設においては通勤経路も含め、安全配慮を徹底することが望まれるため、実習先の決定が従前どおりにはいかない面が生じてくる。また、子どもの権利を改めて認識し、プライベート・ゾーンの尊重、外部から生活の場に入ってくる実習生の振る舞いや子どもとのコミュニケーションの取り方などを深く学ぶ必要があることは、新しい課題として挙げられる。

人間福祉学科の保育士資格取得学生の就職先は、施設が多く、近年その傾向が強まっている。保育士も種別に合った様々な専門性が求められている。施設現場との繋がりを維持して、学生が専門性の高い内容に触れること、また、先輩保育士と接触して各種別をより身近に学ぶ機会を作り、各自の特性と照らし合わせて進路を考える機会が必要だと考える。

4 令和3年度保育実習Ⅰ（施設）代替演習の実施報告

令和3年度保育実習Ⅰ（施設）履修者のうち新型コロナウイルス感染拡大防止のため複数の実習予定施設が中止を決定し、他の施設での受入調整も困難な事態となった。教職センターで協議の結果、代替演習（集中講義）を開講することとなった。（根拠：令和3年5月19日厚生労働省子ども家庭局保育課発事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」）

(1) 時期

2021年12月1日～2022年2月11日（対象学生の空きコマに30コマの授業を設定）

(2) 対象

26名（教育学部教育学科3年生20名、人間科学部人間福祉学科3年生6名）

(3) 授業計画

演習2単位 90時間 授業60時間 レポート作成30時間

(4) ねらいと内容

授業は、次の観点から構成した。（表1）

- ①実習は1施設で行うが、コロナ禍の中で特定の施設に協力をお願いすることも困難であり、代替演習では多くの種別の施設についての「施設の役割と機能」を学ぶことで、施設には固有の目的があり、対象者の特性も異なることの理解を深める方法を採用した。また、多方面の連携機関の講義も入れることで、施設の目的や機能を外側から浮き彫りにすることも意図した。
- ②現場の施設職員から「施設の実際」として、目的、機能、保育士のかかわり等についてできるだけ具体的に呈示、説明していただく。
- ③子ども（利用者）の理解のため、当事者体験や当事者の世界を描いた映画試聴を取り入れる。
- ④支援のためのスキル獲得演習を取り入れた。（PECS、マカトン法の紹介など子ども（利用者）とのコミュニケーションスキルの演習、保護者支援のためのペアレント・トレーニングの演習、CAREプログラムでおとなと子どもの関係作りのためのスキルアップの演習）
- ⑤部分実習として、レクリエーション活動を学生同士で模擬体験として実施する。

(5) その他

- ①振り返りのグループワークを実施し体験をまとめる指導を行う。
- ②学生は講義ごとの授業記録を作成するとともにレポートを作成する。

表1 施設実習Ⅰ（施設）代替演習の授業内容 ※は施設現場の講師による授業

	内 容		内 容
1	《オリエンテーション》 施設利用者・児の特徴、障害についての理解	16	《障害のある児・者のコミュニケーション演習①》 PECSの紹介
2	《DVD教材視聴による施設理解》 障害児入所施設	17	《障害のある児・者のコミュニケーション演習②》 PECSの紹介
3	《DVD教材視聴による施設理解》 児童養護施設、乳児院	18	《障害のある児・者のコミュニケーション演習③》 マカトン法の紹介
4	《施設の実際①》 福祉型障害児入所施設 ※	19	《障害のある児・者のコミュニケーション演習④》 マカトン法の紹介
5	《施設の実際②》 医療型障害児入所施設 ※	20	《レクリエーション活動演習①》（指導案作成）
6	《施設の実際③》 児童発達支援センター ※	21	《レクリエーション活動演習②》（実施）
7	《施設の実際④》 児童相談所一時保護所 ※	22	《レクリエーション活動演習③》（実施）
8	《施設の実際⑤》 乳児院 ※	23	《保護者支援プログラム演習①》 子どもと養育者の関係作りCAREプログラム

9	《施設の実際⑥》 児童養護施設 ※	24	《保護者支援プログラム演習②》 子どもと養育者の関係作りCAREプログラム
10	《施設の多職種連携の実際》 施設心理士 ※	25	《保護者支援プログラム演習③》 ペアレント・トレーニング
11	《施設の他機関連携の実際①》 児童相談所 ※	26	《保護者支援プログラム演習④》 ペアレント・トレーニング
12	《施設の他機関連携の実際②》 児童家庭支援センター、市町村 ※	27	《記録作成とまとめ（障害）》
13	《施設の他機関連携の実際③》 退所者等アフターケア事業所 ※	28	《記録作成とまとめ（社会的養護）》
14	《障害の理解①》 障害体験、家族の理解等 手をつなぐ育成会	29	《振り返りグループワーク（障害）》 障害児・者施設
15	《障害の理解②》 映画視聴『僕が跳びはねる理由』	30	《振り返りグループワーク（社会的養護）》 障害児・者施設

（７）成果と課題

講師は学生に実習に代わる体験をさせたいという熱意で様々な資料や実際の用具、事例や事例の呈示をしながら講義をしてくださり、心からの理解を得る機会となり感謝の念に堪えない。学内では教職センターを中心に学内関係部署に多大な調整をいただき実施をすることができた。代替演習の終盤はまん延防止等重点措置が発出され非対面授業となったがTeamsのブレイクアウトルームなどを用い双方向でのグループワークを多く取り入れた。学生にとっては通常授業に加えてのタイトなスケジュールでの学修であったが、施設実習に代わる特別な学びもできたものとする。



授業風景：右「障害の理解」障害体験（広島市手をつなぐ育成会広島あび隊による）
左「保護者支援プログラム演習」CAREプログラム